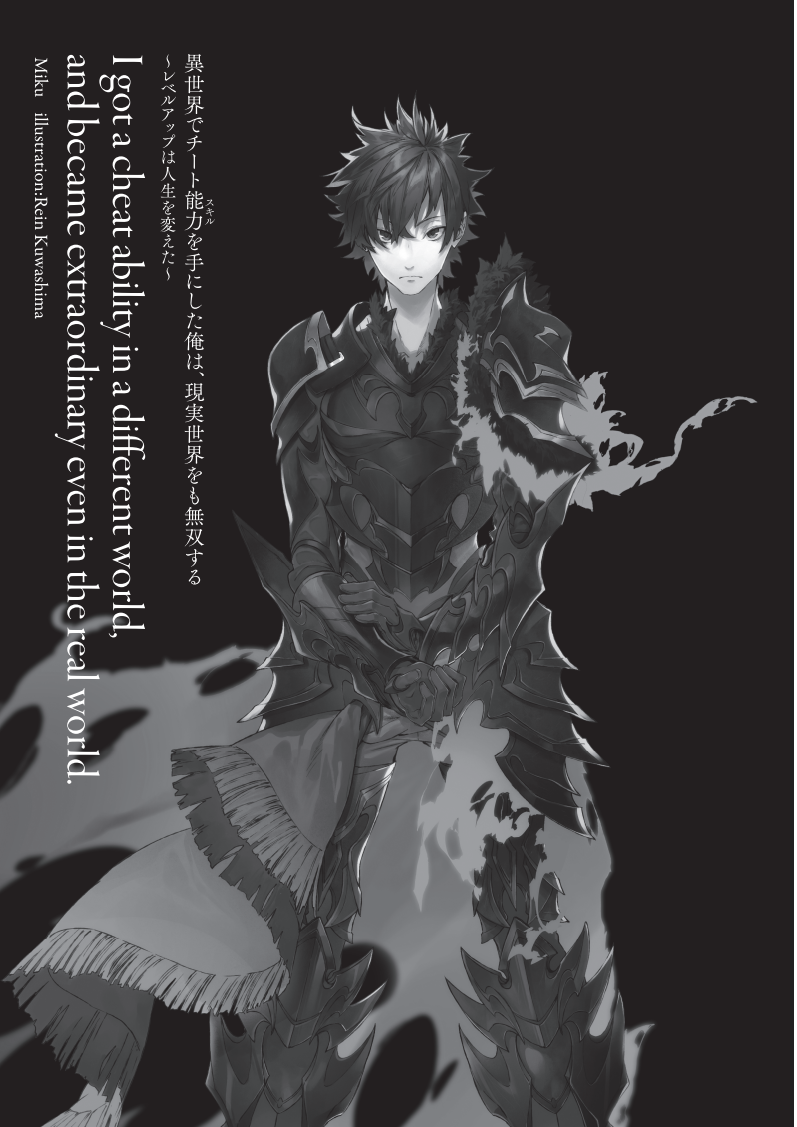
異世界でチート能力（スキル）を手にした俺は、現実世界をも無双する

～レベルアップは人生を変えた～

美紅

ファンタジア文庫

2802



異世界でチート能力（スペル）を手にした俺は、現実世界をも無双する
～レベルアップは人生を変えた～

I got a cheat ability in a different world,
and became extraordinary even in the real world.

Miku　illustration:Rein Kuwashima

口絵・本文イラスト　桑島黎音

プロローグ

俺――――天上優夜は、虐められている。
それも、今に始まったことじゃない。
昔から……それこそ、幼稚園のときから、虐められてきた。
どんなにやめるように頼んでも、さらに面白がって虐めはエスカレートしていくし、先生にどれだけ伝えても聞いてすらもらえなかった。
それどころか、全面的に俺が悪いとさえ言われる始末。
学校の連中や、先生たちから酷い扱いを受けるだけなら、まだよかった。
でも、俺は家族からの愛情も、向けられなかった。
生まれた直後は、可愛がってくれたと思う。
なんせ、両親にとって初めての子供だったわけだからな。
だが、結局そこまでだった。
俺の意思とは関係なく醜くなっていく顔。

食べるときも一般的な食事量であるにもかかわらず、体はどんどん太っていく。
運動をして痩せようとしたこともある。
しかし、そんな俺を嘲笑うかのように、体重は増える一方だった。
食事の量は変えていないのに。
何かの病気かもしれない。
そう思ったときには……両親の愛情は完全になくなっていた。
双子の弟妹が生まれたのだ。
二人とも、俺とは似ても似つかない綺麗な顔立ちで、そんな二人に両親は愛情をたっぷり注いでいった。
それから俺の扱いは一変した。
食事は、双子ばかりいい物を食べさせてもらい、俺は昨日の残りを貰うだけ。
貰えるだけましかもしれないが、多くは残飯だったり、賞味期限や消費期限の過ぎたモノが主な俺の食事だった。
洗濯も双子の服が汚れるからという理由だけで一緒に洗ってもらえず、さらに水道代が勿体ないという理由で、そのまま俺の服は放置される。
だから、小学生の俺はいつも一人で自分の服を公園の水飲み場を使って洗っていた。

服と言えば、双子は新品を買ってもらえるのに、俺はいつもボロボロの服だけ。
小学校のランドセルも中学校と高校の学生カバンも俺だけボロボロで、双子はいつも新品だった。
双子は俺より一つ年下で、これらの理由から、俺は幼稚園に入ったころから多くのことは自分でやらなきゃダメだった。
すごく羨ましかった。
俺は何もしてない……いや、何もしてないのがいけないのか？
どれだけ訴えても、両親は俺の声を聞いてすらくれなかった。
そんな理由から、俺が病気かもと思っても、病院にすら行けなかったのだ。
一応、必要最低限の食事は与えられていたことを考えると、俺は恵まれているのだろう。
たとえそれが、両親にとって外聞を気にするからという理由であったにしてもだ。
――しかし、そんな俺にも、優しくしてくれた人がいる。
それは、もう亡くなったおじいちゃんだった。
いろいろな場所に行っては、いつも変なお土産を持って帰って来るおじいちゃんは、あまり家にいることがない。
でも、帰って来てるときは、おじいちゃんは醜い俺をいつも可愛がってくれた。

それこそ、双子なんかよりも俺だけをずっと可愛がってくれたのだ。
そんなおじいちゃんも、昔からあちこち飛び回って、変なモノばかり収集する変人として知られており、両親もおじいちゃんのことを毛嫌いしていたりした。
小学生になってからは、おじいちゃんの家が近いこともあって、おじいちゃんが家にいるときはいつも遊びにいっていた。
俺の扱いに憤慨したおじいちゃんが、周囲に訴えかけても、俺の見た目やおじいちゃんを変人扱いする周囲の声によって、すべて潰されてしまったのだ。
そんな、俺に優しくしてくれたおじいちゃんも……死んでしまった。

『優夜。決して負けるんじゃないぞ。なぁに、大丈夫。辛いことがあっても、笑みを浮かべていれば、幸せはきっとやって来るさ。いつか、お前に酷いことをしたヤツらを見返せるくらいにな。……それに、これから先の優夜の人生は長い。その長い人生の中で、焦ることなく、ゆっくりと自分と向き合っていきなさい。大丈夫、優夜ならできるさ』

そう俺に告げて、おじいちゃんは息を引き取った。
しかも、俺におじいちゃんが住んでいた家と、財産を譲ってくれたのだ。

もちろん、両親がそれを奪おうとしてきたが、おじいちゃんが徹底的な根回しをしていたらしく、両親は結局俺から奪い取ることができなかった。
だが、その結果、両親は俺を育てることを完全に放棄した。
まあ当たり前の結果と言えば、そうだな。
だから、俺は家を出て、おじいちゃんの家に住むことになった。
おじいちゃんの財産も、決して多いわけではないし、両親からの援助金も一切ない。
それでもおじいちゃんは俺を高校に行かせるために、中高一貫校に入学できるだけのお金を用意してくれていたのだ。
そんなおじいちゃんのおかげで入学金や授業料は払えたが、それ以外の生活費はおじいちゃんの残してくれたお金だけでは厳しく、バイトを掛け持ちしながら日々生活していた。
そして今、急がないとバイトに遅れるのに、それを止められて無理やり体育館裏に連行されていた。
ここでされることと言えば――――。

「クソデブの分際で生意気なんだよっ！」
「がふっ!?」

集団リンチだった。
殴る蹴るの連続。
息をするのもやっとで、お金がない俺はいつも昼飯を抜いているため、口からは胃液だけが出てくる。
しばらくして、殴ったりすることに飽きたのか、虐めの主犯格である同じクラスの荒木武が、咳き込む俺の髪の毛を掴み、顔を持ち上げた。
荒木は、いわゆる不良というヤツで、金髪にピアスをしている。
制服も着崩していて、この高校周辺で活動している【レッドオーガ】という不良チームに参加しているのだとか。
「ガハッ！　ゴホッ！」
「おい、クソデブ。テメェ調子に乗ってないか？　テメェは俺が殴りたいときに殴られるサンドバッグだ。そのサンドバッグの分際で……何帰ろうとしてんだよっ！」
「かへっ!?」
俺の顔面に、鋭い膝蹴りが突き刺さる。
鼻血が止まらず、顔じゅうがとても痛い。
「おいおい、荒木。顔はやめておいた方がいいんじゃね？　傷残るぞ？」

「大丈夫だって。こんなクズ、誰も見向きもしねぇよ」
「キャハハハ！　マジウケるんですけどぉ！」
何人かの派手な見た目をした女子が、俺の姿をスマホで撮ってくる。
その様子を見ていた荒木が、何やら思いついたようで、黒い笑みを浮かべた。
「そうだ、せっかく写真撮るんなら、全裸を撮ってやろうぜ？」
「おっ！　いいじゃんいいじゃん！　それなら、もっと人集めようぜー」
「おっしゃ、知り合い全員にメッセージ送れよな～」
「っ!?　や、やめ……」
「口開くんじゃねぇよ、クソがっ！」
「アガッ!?」
またも、俺の顔に蹴りが突き刺さる。
意識が朦朧としてきて、今にも気を失いそうになるが、気を失ってしまえば、どうなるか分かったものではない。
しかし、無力な俺には、どうすることもできず、周囲には荒木たちが呼んだ人たちが集まって来ていた。
「おいおい、楽しいことがあるっていうから来てみれば……」

「まさかゴミの顔を見るなんてね」
不意に投げかけられる冷たい声に、何とか視線を向けると、そこには整った顔立ちの、非常によく似た兄妹が立っていた。
――天上陽太と天上空……つまり、俺の弟と妹だった。
一つ年が下なので、中学では時々出会うのだが、そのたびに侮蔑の視線を向けられてきた。
俺は今年高校一年になり、二人は中学三年生になるのだが、結局顔を合わせる機会はどこかであるかもしれない。
こんな校舎裏などに普通なら用もないだろうが、今回は荒木に集められたのだろう。
「あ？　陽太、知り合いか？」
「ええ、まあ。認めたくないですが、一応兄……ということになってます」
「兄貴!?　おいおいウソだろ!?　ぎゃはははははっ！　似てねぇなぁ!?」
荒木は、俺を見て大爆笑する。
「まあアレとは書類上の関係ですので、どうでもいいんですが」
「そうかそうか……まあいい。今日は楽しんでいけ」
そんなやり取りの後、なんと二十人近くの人間が集まっており、とうとう俺は荒木たちの手で裸にされていく。

必死に抵抗したし、口でも訴えたが、殴っては黙らされ、とうとう服を全部はぎとられた。
「ぎゃはははははっ！」
「おいおい隠すんじゃねぇよ！」
「みっともねぇ体だなぁ!?」
周囲から浴びせられる侮蔑の言葉と冷たい視線。悔しさと恥ずかしさで、唇を噛みしめながら、必死に耐える。
しばらくの間、周囲にシャッター音が響き渡ると、荒木は集まった人たちに向けて口を開いた。
「今日は集まってくれてありがとよ！　んじゃ、そろそろお開きにするか！」
そう言うと、俺に向き合い、笑みを深め――。
「おらっ！　吹っ飛べ、クソデブ！」
「あかっ!?」
アゴに、強烈な一撃をもらった俺は、無様に吹っ飛ばされ、そのまま気を失った。
目を覚ましたころには、周囲には誰もおらず、空には月が浮かんでいた。

荷物を確認すると、なけなしのお金は奪われ、教科書は破り捨てられ、脱がされた服には泥水がかけられていた。

「うっ……ぐっ……あぅ……」

泣くのを必死に堪えるも、自分が惨めでどんどん辛くなってくる。

……おじいちゃん。俺、どうしたらいいの……？

これが、俺の――――日常だった。

第一章　異世界へ

辛い日々を乗り越え、俺は今、滅多にない癒やしの時間を満喫している。

中学の卒業式が終わり、高校に入学するまでの短い休みに突入したのだ。

本当ならこの短い休みの間にもバイトがあるはずだったが、それもなくなってしまった。

理由は、この間の集団リンチのせいだ。

あの日にあったバイトは、結局行けなかったから無断欠勤となってクビにされ、他のバイト先では、体中の傷が原因でクビにされた。

理不尽だと思ったし、メチャクチャ悔しかったけど、今の俺にはどうすることもできない。

この休み、筋トレでもしてみようかな？　それで何か変わるとは思えないけど。

いろいろ思うことはあるが、新しいバイトを見つけたりしなきゃいけない。

でも、今は時間が少し空いているから、久しぶりにこの家を掃除しよう。

そう考えた俺は、すぐに雑巾や掃除機を持ち出して、家の大掃除を始めた。

普段から簡単に掃除をしているとはいえ、しっかり掃除をしてみると、汚れが多い。
それに、おじいちゃんの家は結構広いので、こういう機会がないと全部の部屋を掃除するのは難しいのだ。
……いや、分かってる。これが、現実から逃げてることなのは……。
暗い気持ちのまま、バケツの水を替えるために洗面台に向かうと、そこの鏡に映し出された自分の顔が嫌でも目に入った。
細く小さい目。小さく鼻の穴が大きい豚鼻。エラが張っていて、頬骨が浮き出ているのに、顔全体はブクブクに太っていて、ニキビやそばかすだらけ。
分厚い唇に歯並びの悪い口。
髪が薄く、若ハゲ気味。
これが、俺の顔。
両親にも、あの双子にも似ていない、俺の顔。
それを見て、俺の中に溜まっていたものが溢れ出してきた。
「あ……あああ……あああああああああああああああっ！」
何度も何度も鏡を殴りつける。
必死に目の前の存在を消そうと、俺は手から血が出ようが構わず殴り続けた。



そして、バケツを大きく振りかぶり、鏡にぶつけると、鏡は呆気なく割れる。
「はぁ……はぁ……」
鏡が割れたことで、少し落ち着くことができたが、俺の中のモヤモヤは晴れなかった。
床には、鏡の破片と、俺の血が落ちている。
……どんなに喚いても、俺の状況は変わらない。
できることなら整形したかった。
でも、お金がない俺には、どうすることもできない。
生活費を稼ぐので精いっぱいなのだ。
暗い現実を見て、俺の心は沈んでいくばかり。
――俺はいったい、何になりたいんだろう。
今の俺に、未来は見えない。就職もまともにできないだろう。
だからこそ、今を生きるので必死で将来何になりたいかとか、そんな夢を考えたことがなかった。
夢……夢か……どうせ夢を抱いても、俺には無意味だろう。
今の俺に、夢を叶える力も気力もないんだから……。
「クソッ！」

自分の無力さに苛立ち、俺は強く壁を殴りつけた――その瞬間だった。
「え……!?」
突然、壁が忍者屋敷のように回転し、俺の知らない部屋が目の前に現れたのだ。
「な……なんだ、これ……」
今までおじいちゃんの家で生活してきて、こんな部屋は見たことがない。
「どうしてこんな部屋が……」
謎の隠し部屋を見つけた俺は、最初こそ警戒していたものの、すぐに好奇心が勝り、気づけば部屋の中に入っていた。
「ここは……」
するとそこは、おじいちゃんが世界中を飛び回って収集したであろう品々が置かれている部屋だった。
おじいちゃんは世界中を飛び回ってはお土産を買って帰って来てたけど、それをどこに片づけていたのかを俺は知らなかった。
だからこんな隠し部屋のような場所にその品々が置かれていることに本当に驚いたのだ。
呆然と目の前に広がる世界中の品々を眺めていると、俺はふと奇妙な感覚に陥った。

「な、なんなんだ？　いったい……」

今まで感じたことのない感覚に戸惑いながらも、その感覚に導かれるように部屋の中を進んでいく。

すると、昔おじいちゃんに見せてもらった物や、完全に初見の物など、様々な品が目に入った。

「……何だ？　あのお面。鬼神みたいで怖いな……ん？　あれは……何の人形だ？」

鬼神のような面や、俺より大きいマネキンみたいな物。

他にも、バスケットボールサイズの赤色の立方体や、どういう原理なのかは分からないが、台座の上でくるくると回りながら浮いている変な石。

中には、エジプトのファラオが入っているような棺まで置いてあった。

周囲の品々を見渡しながら歩いていると、俺はさっきから感じている感覚が、何かが俺を呼んでいるのだと気づいた。

その感覚に導かれるように、さらに中を進んでいく。

……これ全部おじいちゃんが集めたんだよな……。

昔はよくおじいちゃんが自慢してくれたけど、俺はどれもそのすごさが分からなかった。

そんな何気ないおじいちゃんとの思い出が頭に浮かんで俺はまた泣きそうになる。

おじいちゃんが集めた物だが、用途が分からない物だらけなので、今となってはほぼガラクタ同然だ。おじいちゃんが生きていれば、また色々教えてくれたのにな……。

「これ、どうしよう……ん？」

この品々に触ろうにも、何か起こったら怖いしなぁと考えていると、ふと奥の方に置いてあるものに視線が移った。

それは、まるで壁から抜きだしたような形で存在する、扉だった。

木製の扉で、大きなフクロウが彫刻されており、ふちの木々にも彫刻が施されていた。

「これも持って帰って来たのかな……？」

この扉を？

もし持って帰って来たのだとすると、どこの扉よ。

まあ、扉だけなので、開いたところで後ろの壁が見えるだけだろう。

だが、俺はその扉を見た瞬間、今まで感じていた奇妙な感覚が強くなった。

「まさか……あの扉か？」

目の前の扉に俺は見覚えはない。

だが、俺の目と意識はその扉に釘付けにされていた。

この扉こそが、俺を呼んでいるモノの正体なのだろうか……。

「あの扉に何かあるのか？」

そう思いながら、扉のノブに手を伸ばし、開いてみると――――。

「……え？」

そこは、見慣れない部屋だった。

ログハウスのような内装で、木製の大きなテーブルと椅子がひとつに、同じく木製のクローゼット。そして剣や斧といった武器が、山のように置いてあった。

「え？　は？」

意味の分からない状況に、俺の頭はパンク寸前だった。

すると、不意に目の前に半透明の板みたいな物が出現した。

「うわあっ!?」

あまりにも唐突に出現したため、情けない声を出して尻もちをついてしまった。

だが、半透明の板も、その状態の俺の目線の高さまで移動している。

「な、なんだよ、これ……」

狼狽えながら、目の前に出現した半透明の板に視線を向けると、そこにはこう書かれていた。

『スキル【鑑定】を獲得しました。スキル【忍耐】を獲得しました。称号【扉の主】を獲得しました。称号【異世界人】を獲得しました。称号【初めて異世界を訪れた者】を獲得しました』

「え？」

そこには、まるでゲームのメッセージのような物が表示されていた。

か、鑑定？　忍耐？　それに、異世界って……。

取りあえず、起き上がった俺は、一度自分の家に戻って、扉の周りを確認した。

「や、やっぱりどこにも繋がってないよな？」

扉の裏側を確認したりするが、俺の家の壁があるだけ。

なのに、扉の先には見慣れないログハウス風な部屋が広がっているのだ。

「マジで何なんだよ……」

この扉って一体……。

そう思った瞬間、いつの間にか消えていた半透明な板が、再び出現した。

【異世界への扉】……突如地球に出現した、どこかの異世界へと続く扉。なぜ出現したのか、どうやって出現したのかは、神々さえ知らない。繋がる先は不明であり、一度異世界と繋がると、固定される。主となった者は、様々な機能を操ることができる。破壊不可能。

何と、扉の正体がいきなり分かったのだ。

いや、分かったのはいいけどメチャクチャな内容だな!?

ここまで来て、俺はようやく冷静になり、一つの答えに辿り着く。

「もしかして……スキルの【鑑定】ってやつか？」

いや、でも……ここはログハウス風の部屋のなかじゃなく、俺の部屋なのだ。

……待てよ？　なのに、なんで目の前にこのよく分からない板が出現するんだ？

「……考えてもよく分からないけど……これ、スキルとか確認できないのかな？」

思わずそう呟くと、またも板が出現し、そこにはこう表示されていた。

【鑑定】……様々なモノを鑑定するスキル。

【忍耐】……状態異常や精神干渉、または肉体的苦痛に大きな耐性を得る。

「……本当に出てきたよ」

これで分かったが、さっきの扉を調べられたのは、この【鑑定】というスキルのおかげだろう。

それにしても……ますます現実離れしすぎてるな。

「これなら、称号とかも調べられるか？」

ほぼ確信を抱きながらそう呟くと、案の定メッセージが出現した。

【扉の主】……異世界への扉の主。メニュー機能を使用することができる。

【家の主】……かつて、賢者が住んでいたといわれる家の新たな主。家の所有権を得る。

【異世界人】……異世界の人。普通より経験値が多く手に入り、特殊な成長をする。また、スキルを習得しやすくなる。レベルの上限を撤廃。

【初めて異世界を訪れた者】……初めて異世界を訪れた者。別の称号である【開拓者】の効果以上にスキルや魔法を発明しやすくなる。成長する過程で、いい方向に成長していく。また、【アイテムボックス】を使えるようになる。

「おぉ」

よく分からないが、何となくすごそうだった。

【初めて異世界を訪れた者】に至っては、別の称号である【開拓者】とやらより優秀らしいし、【アイテムボックス】とやらも使えるようだ。……【アイテムボックス】ってなんだ？

それに、【家の主】という称号の部分もよく分からない。どの家のことだ？

そんな感想を抱いていると、【扉の主】の説明に書かれた、メニュー機能という部分に気づいた。

「メニュー機能？　これは一体……ってうわっ!?」

また、別のメッセージが目の前に表示される。

そこには……。

【異世界への扉】
所有者：天上優夜
機能：《換金》《転送》《入場制限》

と書かれていた。

「換金？　何かをお金に換えられるのか？　それに、転送と入場制限か……」

全ての項目に意識を向けると、詳しい説明にメッセージが変更される。

【換金】……あらゆる物をお金に変換できる。
【転送】……所有者の現在置に、扉を出現させることができる。
【入場制限】……所有者の指定した人物のみ、扉を通ることができる。

「予想以上に高性能だな!?」

つまり、仮に誰かがこの場所を見つけても、その先には行けないということだ。

さらに言えば、この扉を盗んだとしても、俺のもとに帰ってくるという……。

「換金は正直何に使うのか分からないけど、まあ損はないし、今はいいか」

そんなことより、ここまでゲームみたいな展開なら、ステータスとかあるんじゃないか？

ワクワクしながらそう思うと、目の前に新たなメッセージが表示された。

【天上優夜】
職業：なし、レベル：1、魔力：1、攻撃力：1、防御力：1、俊敏力：1、知力：1、運：1、ＢＰ：0
スキル：《鑑定》《忍耐》《アイテムボックス》
称号：《扉の主》《家の主》《異世界人》《初めて異世界を訪れた者》

絶望した。

まさか、ステータスがオール1だなんて……学校の成績でさえ、ここまで酷いものはとったことがないのに……。

まあ、何となく分かってたことだけどね。

それより、このＢＰってなんだ？

【アイテムボックス】もなぜかスキルの欄に追加されてるし……。

【ＢＰ】……ボーナスポイントの略。レベルアップ時に、10ポイントもらうことができ、

好きなステータスに割り振ることができる。ただし、異世界人の場合、10ポイントではなく、20ポイントもらえる。称号【初めて異世界を訪れた者】を持つ場合、BPは100ポイントもらえる。

【アイテムボックス】……特殊な空間を出現させ、好きなだけ物を出し入れすることができる。ただし、生物を収納することはできない。容量の限界はなく、大きさも問わない。

「……おぉ」

取りあえず、ステータスにポイントを割り振ることができて、なおかつ俺の場合はお得だということが分かった。

【アイテムボックス】も、ゲームみたいな機能だと思えば、理解はできる。

さて、ここまで確認できたわけだが、あと確認しなきゃいけないことと言えば……。

「あの部屋……だよなぁ……」

さっきは誰もいなかったが、よく考えれば不法侵入だ。

それで相手が怒って襲ってきたら、たまったもんじゃない。

【家の主】という、よく分からない称号も手に入ったが、確認してみないことにはなんとも……。

幸い、俺以外は扉を通ることができないようなので、俺の家に逃げ戻れば何とかなるが。

「……もう一度、見てみるか」

そう決めて、俺は再びあの部屋に行くのだった。

＊＊＊

「誰もいない……よな……？」

恐る恐る扉から顔を覗かせ、周囲を確認するも、やはり人の気配はない。

再び部屋の中に足を踏み入れると、木の感触が直に伝わって来た。

部屋に入ると、机や椅子の他に木製のクローゼットもあり、中を見てみると、明らかに俺にはサイズの合わないであろう細身なシャツとズボン、そして下着が数着ずつ出てきた。

非常に肌触りがいいだけに、ちょっと残念だ。

「あ、さっきは気づかなかったけど、窓があるじゃん」

俺は窓に近づき、外の様子を確認する。

すると……。

「うわぁ……」

窓の外は、木々に囲まれていたのだ。

俺の住む家は、こんな山奥みたいな場所じゃない。住宅街で、家の裏や前は、普通に車

が通っている。

なのに、こうして周囲が森ということは……。

「やっぱり異世界……または地球の別の場所に繋がってるとしか考えられないんだよなぁ」

もしかしたら窓に超リアルな絵が貼ってあるのかとも思ったが、窓を開けてみてその考えは捨て去った。

都会では考えられないような、澄んだ空気が胸いっぱいに入って来たし、車の音も聞こえなければ、工事の音もない、静かな空間が広がっているだけだ。

窓を閉めて、部屋の中を改めて見渡すと、机の上に紙が置いてあることに気づいた。

「なんだ？」

紙を手に取り、内容を読み取ろうとするが、そこには俺の知らない不思議な文字が書いてあった。

「……読めん。異世界の言葉か？」

分かるはずもないのに、少しの間手紙と睨めっこをしていると、メッセージが出現した。

『スキル【言語理解】を習得しました』

おい、何だその便利そうなスキルは。

すぐさま鑑定すると……。

【言語理解】……あらゆる言語を理解することができ、読み書きができるようになるスキル。

本当に便利なスキルだった。

これ、地球でも効果があるんなら、英語とか楽勝じゃねぇか。

それはともかく、せっかくスキルを手に入れたので、再び手紙に視線を戻すと、さっきまでは読めなかった不思議な文字が、読めるようになっていた。

要約すると、この部屋の主は、もうすぐ寿命が尽きるということで、この家を手放すことにしたらしい。

そして家族もいないため、もしこの家を見つけた者がいれば、その人に所有権を渡すと。

家の中の物も、すべてくれるそうだ。

所有権の登録は、魔法の力で勝手に更新されるため、所有者以外が家に侵入することはできない……ということらしい。

これは、【家の主】という称号を手に入れたことから、恐らく俺がこの家の所有者になったのだろう。

それに、その称号の説明文から、賢者とやらが住んでいたことが分かるけど、どれだけすごい人だったんだろう？

所有者以外が侵入できないようにするって結構すごいと思うけど、この世界では普通な

のかな？

てか今さらだけど、あの扉の先がこの場所に運よく繋がっていたとは……俺としては大変ありがたいが。

「他の衝撃が強くてスルーしかけたけど、魔法もあるんだよなぁ……」

いや、この状況自体が非現実的すぎて、魔法と言われてもファンタジー要素が薄く感じてしまう。驚きは小さいが、それでも未知の力というモノは何とも興味を惹かれるのだった。

俺も使えるようになったりするんだろうか？

「まあいいや……取りあえず、この家には誰もいないし、これからも俺以外が入ってくることはないって分かって、一安心だな」

俺も現金なもので、この家が俺のモノだと分かった途端、一気に警戒心がなくなった。

となると、今度はこの家にある物を見てみることになるのだが……。

「これ、本物だよなぁ……」

俺の視線の先には、何種類もの武器が。

その中で、一つ目についた剣を持ってみる。

「うおっ!?　お、重たい……」

当たり前だが、俺の筋力はたいしてあるわけでもないので、剣を持っただけでよろめいてしまう。……本格的に筋トレしようかな。まあ昔はやってたけど、一年続けて結局筋肉はまったくつかなかったからね。

「それにしても……立派な剣だなぁ」

両刃の剣で、磨きたてのように輝いており、刃には俺の顔が綺麗に映る。

柄には、まったくと言っていいほど装飾は施されていないのだが、素人である俺が見ても、手にある剣はすごい物だと感じさせる、風格のようなものがあった。

ふと、俺は好奇心から剣に【鑑定】を使用してみると……。

【全剣】……あらゆる剣の頂点。その刃は濁ることなく輝き続け、切れ味は常に最高の状態で維持される。全てのモノを斬ることができるとされるが、それは契約者次第。非売品。契約者：天上優夜。

「マジかよ!?」

予想以上にヤバいヤツだった！　しかもいつの間にか契約したことになってるし！　つか、非売品ってこんな物売れるわけないだろ!?　畏れ多すぎるわっ！

え、賢者さんって何者!?

この剣、乱雑に武器入れみたいな場所に入れられてたんだけど!?

こんなヤバイ物を、適当に扱えるなんて……。

今となっては会うこともできない賢者に驚きながら、俺はこの剣を振ってみたいと思ってしまった。

「いや、男なら一度くらいは……ね？」

誰に言い訳をしているのか分からないが、自分の行為を無理やり正当化させる。……正当化できてねぇな。

まあ、外の確認もしたかったので、俺はこの家の玄関に近づき、恐る恐る扉を開けた。

「おぉ！」

すると、どうやらこの家の敷地は広かったらしく、家の目の前は庭のようになっており、畑のようなモノまであった。

「これ全部が家として認識されてるのか？」

もし違うなら、うかつに外に出られないんだが……。

そう思っていると、目の前にメッセージが表示される。

『この家を囲う柵の中までが、所有者の土地です』

おお、つまり、この庭にも誰も入ってこれないのか！　これで思いっきり外で剣を振り回せるぞ！　よく分からないけど、メッセージさんありがとう！

俺の疑問に答えてくれたメッセージに感謝しつつ、俺は年甲斐もなくはしゃぎながら外に出た。

そして、重たい剣を、自分なりに振ろうとする。

だが……。

「うおおおおおおお!?」

ダメダメでした。

結果として、俺が剣を振るのではなく、剣に振り回されてました。

適当に振ることすらできないとは……いや、分かってたけどね。

「はぁ……はぁ……いやぁ、楽しかった……」

何もできてないくせに、俺は妙な満足感に包まれながら、その場に寝転がる。

すると、目の前に再びメッセージが現れた。

『スキル【剣術：1】を習得しました』

「へっ!?」

【剣術】スキル!?　振り回されてただけで!?

それに、この剣術の横の数字って……。

【剣術：1】に意識を向けると、詳しい説明が表示される。【鑑定】スキル様様だな。

【剣術：1】……剣を扱うスキル。数字は熟練度を表しており、最高値は10。

つまり、今の俺は剣を扱う超初心者ということか？

いや、正直初心者と呼ぶのもおこがましいと思うんだけど……。

それでも、こんなに簡単にスキルって習得できるモノなのか？

「……あ、【異世界人】の効果か」

恐らく、この称号が関係してるのだろう。

「そうだとしても、この速さで習得できるってのも変な話だけどなぁ……他の武器はどうだろう？」

新しい好奇心を刺激された俺は、剣を元の場所に戻すと、他の武器を持って、庭に出た。

それぞれに、鑑定をかけた結果、どれもヤバい品物ばかりで、ピックアップするとこんな感じである。

【絶槍】……神槍を超えた、唯一無二の槍。契約者次第でどんなモノでも貫くことができると言われている。折れることはない。投げれば相手に必ず当たり、手元に戻って来る。非売品。契約者：天上優夜。

【死鎌】……死神すら殺す大鎌。契約者が望むもの全てを切り裂くと言われている。この鎌に斬られた存在は、どんな小さな切り傷であっても致命傷となる。非売品。契約者：天

上優夜。

【無限の籠手】……殴打の威力を上げるだけでなく、防具にもなる砕けることのない籠手。一撃が無限の攻撃となる。非売品。契約者：天上優夜。

【無弓】……姿形のない、究極の弓。契約者の意思に応じて、無限に矢を生成する。その矢は、世界を撃ち抜くとされる。契約者が望む的に絶対当たる。非売品。契約者：天上優夜。

などなど……。

まあ、かなりの量があったけど、一応全部触ってみることはできた。

そこで感想を一つ。

どれもヤベェ。

何でこんなものがゴロゴロ転がってるのかも分からなければ、賢者が何者かも分からないが、それ以上に俺が契約者になってることがもっとヤバい。

そして、今の俺のステータスは……。

【天上優夜】

職業：なし、レベル：1、魔力：1、攻撃力：1、防御力：1、俊敏力：1、知力：1、

運：1、BP：0

スキル：《鑑定》《忍耐》《アイテムボックス》《言語理解》《剣術：1》《槍術：1》《鎌術：1》《格闘術：1》《弓術：1》《鞭術：1》《斧術：1》《鎚術：1》《杖術：1》《棒術：1》……etc。

称号：《扉の主》《家の主》《異世界人》《初めて異世界を訪れた者》

もう意味が分からない。

全部の武器で遊んでたら、こんな状況になったのだが、それにしたってこれはおかしいだろ。

思わず顔を引きつらせていると、メッセージが出現した。

『条件を満たしました。全武術スキルを統合し、【真武術：1】を習得しました』

【真武術】ってなんぞ!?

すぐに【鑑定】すると、こう表示された。

【真武術】……あらゆる武器や格闘術を修めた者のみ到達できる境地。全ての武器や格闘術を使いこなすことができる。

使いこなせませんけど!?

無理だろ、どう考えても！　ただ武器に振り回されてただけなのに！

だが、俺の意思とは関係なく、ステータスの表記が変更されており、あの大量にあった武器などのスキルが消え、【真武術】とやらになっていた。

……賢者さんもこのとんでもスキルを有していたのだろうか？　……してたんだろうなぁ。

よく分からないまま、俺はぶっ飛んだスキルを手に入れたのだった。

＊＊＊

あれから、外に散らかした武器を片付けようとして、【アイテムボックス】というスキルを手に入れていたことを思い出し、それを使ってみることに。

だが、いざ使ってみようとしたところで、どうすればスキルを発動できるのか分からず、取りあえず心の中で【アイテムボックス】と唱えると、俺の目の前に真っ黒い空間が出現した。

突如現れた黒い空間に腰を抜かしたが、俺の意思ひとつで出現させたり、消滅させたりできることに気づくと、そのまま俺の家にあったボールペンを黒い空間に放り込んでみた。

そして、一度空間を消滅させ、再び出現させた後、その空間に恐る恐る手を突っ込むと、

脳内にボールペンが入っているという情報が流れてきた。
それからの行動は早く、早速散らかした武器を次々と【アイテムボックス】に放り込んで片付けた。
もちろん、出し入れが自由であることは確認済みだ。地球でも出せたのは驚いたけどな。
そんな確認を一通り終えたあと、精神的に疲れた俺は、よろよろとした足取りで不思議な扉をくぐり、おじいちゃんの隠し部屋に戻った。
夢じゃ……ないんだなぁ……。
思わず遠い目をしていると、不意にお腹が鳴った。
時計を確認すると、ちょうどお昼時だった。
そう言えば……あの扉の向こうも、こっちと同じ時間の流れっぽい。俺としてはありがたいけど。
空腹を満たすために家の冷蔵庫を開けるも、中は空っぽだった。
「うわ……買い出しに行こうと思いながらも行ってなかったからなぁ……」
非常に面倒くさいが、このままだと空腹で倒れてしまうため、俺は財布を手に取ると、そのまま何か食べるものを買うために、近くのコンビニに行くことにした。
外に出ると、まだ春先だというのに強い日差しに晒され、すぐに汗が出てくる。

うん……デブの辛いところだなぁ……。
もうすでにバテながらも、何とか近くのコンビニまで辿り着くが、そこで俺は嫌な場面に遭遇した。
「なぁなぁ、いいじゃんよ。俺たちとお茶しようぜ？」
「ですから、何度もお断りしているじゃないですか！　帰らせてください！」
「そう言わずにさぁ～」
派手な格好をした男たちが、俺と同い年くらいの少女に絡んでいるのだ。
俺の来たコンビニは、人通りの多い場所とはいえ、所詮住宅街だ。そんな場所で、しかもコンビニ前でナンパをするなんて……。
少女は嫌がっており、何とか男たちから離れようとするが、男たちは執拗に迫る。
周囲を見てみると、人はいるものの、誰もが見て見ぬふりをしていた。
すると、男の一人がついに少女の腕をつかんだ。
「ほらほら、行こうぜ」
「大丈夫、悪いようにはしねぇからさ」
「イヤッ！　放してください！」
「あ、あの！」

「……あ？」

一斉に、男たちの視線が俺に向けられる。

その視線は、非常に鋭く、それでいて俺のことを見下しているのがハッキリと分かった。

……正直な話、すごく怖いし、俺も無視していたい。

でも、おじいちゃんがいたら、迷わず助けに行ってただろう。

おじいちゃんは、人が困ってたら迷わず助けるような人だったからな。

たとえ周りから偽善者扱いや変人扱いされようとも、自分の信念を変えないおじいちゃんが、俺は誇らしかったし大好きだった。

そう思ったら、俺の口は自然と動いていた。

「んだよ、デブ。俺らに用でもあんのか？　あぁ!?」

「ひっ！　い、いえ……あの……その……い、嫌がってると思うんですけど……」

「はぁ？」

俺の言葉が気に障ったらしく、男たちは少女を放すと、俺を囲むように立ちふさがった。

「なめてんのか？　テメェ」

「いや、そういうわけじゃ……」

「ごちゃごちゃうるせぇんだよっ！」

「ぎゃっ!?」

男の一人が、容赦なく俺の顔を殴りつけてきた。

あまりの痛さに転がると、男たちはそれだけで終わらず、俺の体中を蹴りつけてきた。

「俺らのやることに口出しすんじゃねぇよ……このクソがっ！」

「きめぇんだよっ！」

「死ねやオラァ！」

顔、胸、腹。

男たちの鋭い蹴りが突き刺さるたびに、俺の意識は飛びそうになった。

すると、散々俺をボコボコにしてきた男たちは、突然暴行をやめ、焦り出した。

「おい、サツが来たぞ！」

「はぁ!?　ふざけんじゃねぇ！」

「誰かがチクったんだろ？　いいから逃げるぞ！」

どうやら、誰かが警察に通報してくれたらしく、男たちはその場から走り去っていった。

体中が激しく痛むが、我慢できないほどじゃない。骨も折れてないっぽいしな。

……ああ、こんなところで日ごろの耐性を発揮しなくてもなぁ。

とも思ったが、ちょっとおかしい。



今までの俺なら、こういうときすぐに意識を持っていかれてたはずなのに、今はギリギリとはいえ、意識をつなぎ留められている。

……もしかしなくても、スキルの【忍耐】が発動しているんだろうか？

【鑑定】が家で使えた時点で分かってたことだけど、地球でもスキルって働くんだなぁなんて思っていると、さっきまでナンパされていた少女が駆け寄ってきて、俺のことを助け起こしてくれた。

「大丈夫ですか!?　すぐに救急車を……！」

「だ、大丈夫です……大丈夫ですから……き、救急車はいいです……」

「で、ですが……」

「いえ、本当に……大丈夫なんで……」

こんな醜い俺を心配してくれる少女に感動しながら、俺は痛みをこらえて立ち上がった。

「いっ……」

「どうぞ、私の肩に摑まって……」

「い、いえ、大丈夫です……大丈夫ですから……」

「で、ですが……」

「本当に大丈夫ですから……それよりも災難でしたね。これからは気を付けてください」
本心は分からないが、俺のことを心配してくれている少女から俺は距離をとった。
先ほど男に襲われたばっかりだし、同じ男である俺が側にいるのも嫌なんじゃないか？
と勝手に思っての行動だが。
まあ、男としてどころか、人間としてさえ認めてもらっていないなら、関係ないかもしれないけど。
そう自虐的に考えていると、駆け付けてきた警察がやって来た。
警察官は、女性二人と男性一人で、これなら少女も安心だろう。
「さっき、通報があって来たのですが……」
「あ、私が男の人たちに絡まれていて、困っていたところをこの人に助けてもらったんです！　それで……」
少女が詳しく警察の人たちに説明すると、被害者は俺だけだったこともあり、大事にはならなかったようだ。……被害者は俺だけだからってのも変な話だけどな。
ちょっとした事情聴取を受けた後、警察官は少女を家まで送っていくことになったようだ。
そして、俺の方に向き直る。

「君も送ろう。家はどっちだい？」
「い、いえ、大丈夫です……自分は、ここで買い物するために来たので……」
「そうか……では、気を付けてね」
警察官たちが、少女を連れて行こうとすると、不意に少女は俺の方を向いて、頭を下げた。
「この度は、助けていただきありがとうございました！」
「え？　あ、いや、気にしないでください……結局、俺は何もできませんでしたし」
「そんなことありません！　事実、私はとても嬉しかったです！　本当にありがとうございました。このお礼は、必ずいたしますので」
「き、気にしないでください。……じゃ、じゃあ、これで……」
普段人と話すことのない俺は、言葉に詰まりながらも何とかそう言って話を切り上げ、少女と別れた。
……少女の顔を、俺はまったく見られなかった。
そもそも、俺は女性と話すことなんてまずないし、話したとしても、それは一方的に浴びせられる罵声の数々だ。
そんな経験をずっと続けたせいで、俺の女性に対する免疫はゼロ。

だが、少女は形だけかもしれないが、俺のことを心配してくれたのだ。
いい子そうだったが……ああいう子には、幸せになってもらいたいものだ。
そう思いながら、俺はコンビニで目的の物を買う前に、もう少し足をのばしてスーパーで食材などを買って、その帰りに再びコンビニに寄り、俺はやっと家に帰るのだった。

＊＊＊

昼食を終え、家の中の掃除も済ませた俺は、再びあの不思議な扉の向こうへと行っていた。
そして、そのまま部屋の外に出ると、改めて庭を見渡す。
「やっぱり広いなぁ……これ全部が俺のモノになったとか、未だに信じられん……」
いや、この庭や家だけでなく、そもそもここが異世界であること自体が不思議で仕方がないのだ。
だが、【鑑定】のスキルで扉を調べたら、神様すらその理由を知らないわけだからな。
てか、何気にここで神様の存在を暗に示してるよねぇ!?　いたんだね、神様って！
そんな風に思いながら、辺りを見渡していると、不意に凄まじい悪寒がした。
体が一瞬で硬直し、息苦しくなって、自然と呼吸する回数が増える。

体中から汗が噴き出し、何故急にこんなことになったのかと頭が混乱しながらも、必死に周囲に視線を巡らせた。
すると、柵の外と庭の境目である入り口に、俺を襲った悪寒の正体が存在していた。
「ハァ……ハァ……！」
「……」
まるで血塗られたような赤黒い皮膚に、２ｍを超える体。
デブである俺の横幅と同じくらい太く、盛り上がる筋肉を持つ腕。
顔は架空の存在である鬼のようで、下あごから二本の鋭く立派な牙が生えていた。
圧倒的強者の風格を漂わせるソイツは、俺のことをじっと見つめている。
鋭い視線で射竦められながらも、わずかに残った理性で【鑑定】のスキルを発動させてみた。

【ブラッディ・オーガ】
レベル：３００、魔力：１００、攻撃力：５０００、防御力：５０００、俊敏力：１００
０、知力：５００、運：１００

わけが分からねぇ。

何だよ、このふざけたステータス。こっちはオール1だぞ。

そもそも、レベル1相手にレベル３００ってオカシイだろ!?

それにブラッディ・オーガって……俺を虐めている荒木が【レッドオーガ】という似た名前の集団に所属していることを思い出し、さらに気持ちが沈む。

相手の詳細を見たことで、より一層混乱が深まっていると、ソイツ――――ブラッディ・オーガは、雄叫びを上げた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「ひっ!?」

とんでもない声量に俺は腰を抜かした。

その際、ちびりそうになったのだが、俺の極小のプライドがそれを防いだ。

だが、腰が抜けて動けないのには変わりなく、ブラッディ・オーガは、俺めがけて突進してきた。

それを見た瞬間、俺はもうダメだと思った。

だが――――。

「ガアッ!?」

ブラッディ・オーガは、まるで見えない壁に阻まれたかのように、俺の家の敷地に入ることはできなかった。

「あ……」

そうだ……この家には、俺以外の存在は入れないんだった！

今さらそのことを思い出した俺だが、それで俺が何かできるかと言われれば、そういうわけでもない。

現に、ブラッディ・オーガは、敷地に入ろうと、恐ろしい速度で拳を見えない壁に叩き付けていた。

「ガアアアアアアアアアッ！」

しかし、俺が何もできないように、ブラッディ・オーガもこの家には何もできず、無意味な攻撃を続けていた。何というか、このまま放置してもまったく問題なさそうだな。

そんな風に、少し気を緩めた瞬間、ブラッディ・オーガは攻撃を止め、近くに生えている木に手を伸ばした。

そして、軽々とその木を引っこ抜くと、家めがけて投げつけてきたのだ。

「え？　え!?　う、うわあああああああああっ！」

生物はダメでも、それ以外のモノなら大丈夫なのか!?　と、ブラッディ・オーガの行動

に本気で恐怖したが、この家の防衛性能は俺の予想を上回り、引っこ抜いた木すらはじき返した。

……これ、本当にこの家には何もすることができないんだな。

なんせ、直接間接両方の攻撃を無効化されるわけなのだ。

ともかく、ブラッディ・オーガの脅威が俺にまで及ばないと理解したのだが、それでもブラッディ・オーガは諦めずに攻撃を再開した。

たとえ襲われないとわかっていても、精神衛生上非常によろしくない。

どうにかできないか……。

そう思ったとき、俺はある疑問を抱いた。

「……こっちからの攻撃は通るのか？」

そう、外からの攻撃は全て防いでいるようだが、内側から外に向けて攻撃するとなると、どうなるのだろうか？

その疑問を解消すべく、俺は【アイテムボックス】から【絶槍】を取り出した。

なぜ【無弓】ではなく、【絶槍】を取り出したかというと、恥ずかしながら、俺の筋力じゃ【無弓】を引くことができなかったのだ。それでも【弓術】は習得できたけどね。

それに比べ、【絶槍】も重たくて、とてもじゃないがブラッディ・オーガまで投げ飛ばせないが、この槍は一度目標を定め、ほんの数ミリだろうと手から離れれば、必ずその目標めがけて飛んでいくのだ。しかも、自動的に戻って来るしな。

その確認は、【全剣】を振り回した後、他の武器で遊んだ際に済んでいる。

というわけで……。

「……投げてみるか？」

俺は、一種の実験として、目の前で攻撃を続けるブラッディ・オーガに【絶槍】を投げることにした。

生物に殺傷能力のある武器を投げつけるという、普段の俺なら絶対にしない行為だが、ブラッディ・オーガからもたらされた恐怖によって、そこらへんの感覚が麻痺してしまっていた。

「……よし」

俺は覚悟を決めると、【絶槍】を強く握った。

【絶槍】は、華美な装飾など一切なく、ただ貫くことに特化したような、武骨な槍だ。

だが、その分とても使いやすく、超初心者な俺が握っても、しっくりきていた。

それでも重たいことに変わりはなく、俺は体をよろめかせながら、何とか投げることに成功した。

「お……りゃぁっ！」

「ガアッ!?」

すると、ブラッディ・オーガは、【絶槍】から放たれる威圧感を察したのか、警戒する様子を見せる。

俺も全力で投げたとはいえ、あまりの重さに数センチも飛ばないようなショボい一撃なのだ。

ブラッディ・オーガも、そのことを瞬時に理解し、すぐに警戒を解いたが……。

「ガ、ガァ!?」

【絶槍】は、俺の力なんて関係ねぇと言わんばかりに、一瞬にしてブラッディ・オーガにまで到達すると、呆気なくその体を貫いた。

「ガ……ガ……」

ブラッディ・オーガは、まるで理解できていない様子で、目を見開いた状態で胸に大きな穴をあけてその場に倒れた。

「や、やった……」

本当なら、今の言葉はフラグになりかねないんだろうが、その心配はなく、ブラッディ・オーガは光の粒子となってその場から消えていった。

俺は思わずその場にへたり込む。

「は、ははは……」

生きているという実感と、生物を殺したという実感。

その二つが混ざり合い、俺は乾いた笑みを浮かべることしかできなかった。

だが、生物を殺したにもかかわらず、思ったほどのショックは受けなかった。手に伝わる感触などがなかったことが幸いだったのだろう。

しばらくの間、その場で呆然としていると、ブラッディ・オーガが死んだ場所に、色々とモノが落ちていることに気づいた。

……動きたいが、足に力が入らねぇ。

情けないことに、腰が抜けた上に膝が笑っているので、今すぐ動けそうになかった。

そんな状態でいると、不意に目の前にメッセージが出現した。

『レベルが上がりました』

「へ？」

俺は、再び呆然とするのだった。

＊＊＊

れ、レベルアップ……？

俺は唐突に表示されたメッセージに、呆然とする。

……いや、冷静に考えれば、それもそうか。

なんせ、レベル1がレベル３００を倒したわけだからな。

今さらだが、攻撃力1なのに、これだけレベル差のある相手を倒せたのは、【絶槍】の素の攻撃力が高すぎたせいだろう。

「……【絶槍】ヤバすぎだろ」

しかも、【絶槍】クラスが大量にまだ手元にあるのだ。これ、全部使いこなせるようになったらヤバいよな……。

それより、レベルアップしたって言うけど、何が変わったんだろうか？

俺はステータスを表示して、変更点を確認した。

【天上優夜】

職業：なし、レベル：１００、魔力：１０００、攻撃力：１０００、防御力：１０００、俊敏力：１０００、知力：１０００、運：１０００、ＢＰ：１００００

スキル：《鑑定》《忍耐》《アイテムボックス》《言語理解》《真武術：１》。

称号：《扉の主》《家の主》《異世界人》《初めて異世界を訪れた者》

「いやいやいやいや」

上がりすぎだろ。

……でも相手はレベル３００だったわけだし、こんなものなのか……？

それに、レベルがひとつ上がるごとにステータスは10上がるんだな。これが多いのか、それとも全員同じなのかは分からないが。

だとしても、このＢＰが他の人より異常に多いのはさすがに分かる。【初めて異世界を訪れた者】の効果なのは知ってるが。

「このＢＰってのを、自由に振り分けられるんだよな……」

今すぐ振り分けてもいいんだが、それよりもブラッディ・オーガが倒れた場所に、何かが散らばっているのが気になる。先にそっちを見に行こう。

未だに震える足に力を込めて、おぼつかない足取りで目的の場所まで辿り着いた。

「……何だ？」

その場所に落ちていたのは、手のひらサイズの不思議な色合いの宝石みたいなものと、ブラッディ・オーガの口から生えていたのと同じような、立派な牙。そして赤黒くて禍々

しくもカッコいい、いくつかの鎧だった。

「……取りあえず、回収しよう」

敷地の入り口付近で倒したおかげで、回収は素早く行うことができた。

回収したアイテムは、数こそ多くはないが、何とも言えない魅力？　威圧？　とにかく、素人目に見ても、すごい物だということが分かるものだった。

ただ、こうしていくら眺めていても俺には何も分からないので、素直にスキル【鑑定】を発動させた。……なんかナチュラルにスキルを発動するようになってきたな。

【血戦鬼の大牙】……ブラッディ・オーガの牙。その牙は見かけ倒しではなく、ブラッディ・オーガの咬合力と合わさり、あらゆる獲物の皮膚を容易く貫く。加工すれば、頑丈で鋭い武器を作ることもできる。

【魔石：B】……ランクB。魔力を持つ魔物から入手できる特殊な鉱石。ランクは下から順にF、E、D、C、B、A、Sとあり、ランクが上がるほど高価。

【血戦鬼の胴鎧】……ブラッディ・オーガのドロップアイテム。強靭なブラッディ・オーガの筋繊維と皮膚でできている。並大抵の筋力ではこの鎧に傷をつけることはできない。装備者の攻撃力に補正がかかる。

【血戦鬼の籠手】……ブラッディ・オーガのドロップアイテム。強靭なブラッディ・オー

ガの筋繊維と皮膚でできている。並大抵の筋力ではこの籠手に傷をつけることはできない。装備者の攻撃力に補正がかかる。

【血戦鬼の腰鎧】……ブラッディ・オーガのドロップアイテム。強靭なブラッディ・オーガの筋繊維と皮膚でできている。並大抵の筋力ではこの鎧に傷をつけることはできない。装備者の俊敏力に補正がかかる。

【血戦鬼の脚甲】……ブラッディ・オーガのドロップアイテム。強靭なブラッディ・オーガの筋繊維と皮膚でできている。並大抵の筋力ではこの脚甲に傷をつけることはできない。装備者の俊敏力に補正がかかる。

ファンタジー満載のアイテムだった。

魔石や牙って……一般人の俺がどこで使うの？　いや、鎧も現代の地球じゃ使わないけどさ。

そもそも使い道が分からねぇよ。武器は間に合ってるし、魔石に至ってはアルファベットがランクとやらを示していることぐらいしか分からない。

しかも鎧のサイズは太ってる俺には合っておらず、装備することができないのだ。本当にどこで使うの？

とはいえ、ブラッディ・オーガの腹筋のような見た目の胴鎧と、全体的にどこか刺々し

い籠手。腰鎧は胴鎧や籠手と同じような鋭さを感じさせ、それに赤色のマントがつけられており、脚甲は籠手のデザインを脚の部分に合わせて調整した感じでとてもカッコいい。

「せっかく回収したけど……使い道が分からないんじゃなぁ」

なんだか、BPを割り振るのを後回しにするほどのことでもなかったかも。

そう思いながら、俺は今度こそBPを振り分けることにした。

「んー……振り分けるにしても、魔法なんて使えないし、どうせなら攻撃力とか上げたいよなぁ」

俺は元々ゲームとかでは、攻撃力をひたすら上げて殴るスタイルが好きなのだ。まあゲームなんて娯楽用品持ってないから、妄想でだけどな！

ともかく、使えもしない魔力に振り分けるのもあれだし、何より虐められ続けてる俺からすると、防御力とかを上げた方がいいかもしれないな。

「……でも、この運ってのもなぁ……」

本来、運っていうのは、どれだけ頑張っても、筋力などと違って、簡単に上がるわけないのだ。いや、レベルアップしたら同じだけ上昇したけどさ。

そう考えると、運に振り分けるのもアリだよなぁ。

「……ヤバイ、楽しくなってきたぞ」

そもそも、ゲームをあまりしたことがない俺からすると、この状況は一つの娯楽みたいになりつつあった。もちろん、あの殺気に当てられたりと怖い目にも遭ったが、それでもこの不思議な状況は魅力的だった。

まあ、レベルが上がって、攻撃力やらが上昇してるけど、特に変わった様子もないし、あまり気にせず、それこそゲーム感覚で選んでもいいだろう。

楽観的に考えた俺は、思うままに、BPを振り分けてみた。

その結果……。

【天上優夜】

職業：なし、レベル：100、魔力：1500、攻撃力：3000、防御力：3000、俊敏力：3000、知力：1500、運：4000、BP：0

スキル：《鑑定》《忍耐》《アイテムボックス》《言語理解》《真武術：1》。

称号：《扉の主》《家の主》《異世界人》《初めて異世界を訪れた者》

こんな感じになりました。

魔力は魔法使えないし、知力って純粋な学力が上がるならいいけど、ゲーム的に考えた

ら魔法の威力が上がるだけとかになりそうだし、そこまで多く振り分けなかった。
代わりに、攻撃・防御・俊敏の三つを上げて、バランスをよくしてみた。
そして、よく分からないけど努力ではどうしようもなさそうな運に、一番多く振り分けている。
さて、これで決定したわけだけど……。
「……何も起こらないな」
やっぱり、表示がゲーム的なだけで、俺の体に何か起こるわけじゃないんだろうか？
「まあいいや……とにかく、今日はいろいろありすぎて疲れたし、帰るか……」
いや、元々家のなかなんだけど。
くだらないことを考えながら、さっきよりマシになった体に力を入れ、【異世界への扉】に近づいた。
すると、突然目の前にメッセージが出現した。
『換金できるアイテムがあります。【血戦鬼の大牙】、【魔石：B】、【血戦鬼の胴鎧】、【血戦鬼の籠手】、【血戦鬼の腰鎧】、【血戦鬼の脚甲】を換金しますか？』
「へ？」
か、換金？

一瞬何のことか分からなかったが、称号の【扉の主】を獲得したことで使えるようになったという機能の中に、【換金】という項目があったことを思い出した。
「換金って……一体どうなるの？」
よく分からないが、確かにこれらのアイテムを持ってたところで俺には使い道がない。
ただ、鎧と籠手と脚甲はいつか身につけることがあるかもしれないということで候補から外して、それ以外を【換金】した。
すると……。
『アイテムを換金しました。【血戦鬼の大牙】……50万円。【魔石：B】……100万円』
「は？」
思わず間抜けな声が出た。
しかも、さらに追い打ちをかけるように、何もない空間から紙の束が落ちてきた。
「……」
意味が分からなかった。
よく見ると、1万円札の束である。
呆然としながらそれを拾い確認すると、メッセージに表示された通り、合計150万円が手元にあるのだ。

俺の知る限りの方法で、そのお金が偽札じゃないか確認するが、どうも本物っぽい。
思わずスキル【鑑定】を使い、調べてみた。

【１５０万円】……異世界のアイテムを換金した物。札番号など、地球の経済が混乱しないように地球内の情報を操作して生み出した、正真正銘の１万円の札束。

余計混乱した。
地球内の情報操作って何!?　いや、本物なのは分かったけど！
どこまで【鑑定】を信じていいのか分からないが、もし鑑定の内容が本当なら、俺は１５０万円を手に入れたことになる。
浮かれているだけかもしれないが、俺には【鑑定】の内容が本当にしか思えなかった。
そもそもこの扉自体が神様すら知らないようなものらしいし、地球の情報操作とやらができてもおかしくない。理解は追いつかないけど。
でも……。
「えぇぇ……本当に１５０万円なのかよ……これ、どうするの……」
いや、生活するのもギリギリな俺からすれば、非常にありがたい。
人としてダメだとか、もっとよく考えて行動しろとか言われようが、俺はいい人ってわけじゃないし、頭もよくない。

目先に利益があるなら、簡単に飛びついちゃうよ。
ということで……。
「……もらっとこ」
ただ、銀行に預けるわけにもいかないので、鎧や籠手、脚甲と一緒に【アイテムボックス】に放り込んだ。うん、少しずつ使っていこう。
そう決めた俺は、最後の最後で大きく驚かされ、フラフラな状態で家に帰るのだった。

第二章　レベルアップの恩恵

その日の晩、精神的に疲れていた俺はすぐに眠りに就くことができたのだが、突然体に違和感を感じ、目が覚める。

「……ん？　何だ……？」

体中が熱を持ったように熱いのだ。

原因不明の体の違和感に首を捻っていると、急に俺の体を激痛が襲った。

「がっ!?　がああああああああああああああああああああっ！」

凄まじい痛みに、俺は絶叫する。

一部分だけが痛いとかではなく、全身が痛いのだ。

それも、体中から変な音が鳴り響き、まるで全身の骨格や筋肉、神経が作り変えられてるような……いやそれどころか、遺伝子レベルで作り変えられてるような痛みが、ずっと続いているのだ。

自分でも何を言ってるのかよく分からないが、本能的な部分がその認識で正しいと告げ

ている。

「うっ、がっ、あが……」

口や喉にも異変は現れ、まともにしゃべることすらできなくなった。

「あ――――」

あまりの痛さに、俺はついに意識を失った。

＊＊＊

「ん……ん？」

翌朝。

目が覚めると、俺の体は昨晩の痛みがウソのように消えており、それどころか非常に体が軽かった。

「昨晩のは一体何だったんだ……」

激痛の原因が分からず、俺は首を捻るばかりだったが、お腹もすいているため、朝食を作るために起き上がった。

「……え？」

その瞬間、俺の穿いていたズボンもパンツも、下にずり落ちた。

しかも、そのまま俺の目に飛び込んできたのは、綺麗に六つに割れた腹筋と、尋常じゃないほど立派な自分の陰部。で、デケェ……。

思わずその腹筋を触ってみると、自分で自分のお腹を触っている感覚があるため、俺の体で間違いなかった。

……。

「はあああああああああああああああ!?」

ナンダコレ!?　これ本当に俺の体か!?

何度も何度も自分の腹を撫でまわすが、俺の体に違いなく、他の部分……顔や頭を触ってみると、ニキビなどのデキ物は綺麗になくなっており、髪の毛もフサフサだった。

次々と明らかになる自分の体の変化に俺は呆然としていたが、お腹が鳴ったため、取りあえず朝食を作ることにした。

台所への移動の際も、自分の視線の高さが違うことに気づき、再び立ち止まりそうになったが、何とか踏みとどまって、調理を始めることができた。

ただ、朝食ができた後は正直呆然としたまま食事をしていたため、味などまったく分からなかった。

食事を終え一息つくと、改めて自分の体に起こった変化について考える。

……どう考えても、昨日のレベルアップってやつが原因だよなぁ……。

冷静になったことで、レベルアップをしたことを思い出した俺は、すぐにそれが原因だと思った。それ以外、こんな状況になる要素がないからな。

昨日の時点でレベルアップの変化が現れず、夜寝ている間に起こったのは、いわゆる成長する過程と一緒なんじゃないか？　それにしては劇的に変わりすぎなわけだが。

「鏡でもあればいいんだけど……」

見た目を確認しようと鏡を探したのだが、そう言えば昨日俺がヤケクソになって壊したのを思い出し、家の中に鏡がないことに気づいたのだ。

ただ、見た目がどう変わったか確認できずとも、今のところ何の支障もない。もともと酷かったんだし、それ以上どう変わろうがどうでもいい。俺にはどうしようもないしな。

今はそんなこと以上に深刻な問題に直面している。

それは……。

「着られる服がない……」

そう、俺の体のサイズに合う服がないのだ。

上着はぶかぶかでも着ようと思えば着ることはできるが、ズボンやパンツだけはどうしようもなかった。

ぶかぶかすぎて、どう頑張ってもズリ落ちるのだ。
今までベルトというものをしたことがないため、腰に固定する手段がない。いや、最終手段として何か紐みたいなもので固定すれば何とかなるかもしれないが……。
どっちみち、この状況が続くのは困る。非常に困る。
今の体のサイズに合う服を買いにも行けないし、食料を買いに行くこともできない。
そうだ、制服もこの体型じゃ着ることはできないだろう。
珍しいことに、高校の制服は中学と同じであり、毎年配られる名札の色で見分けている。
そのため、中学の制服を着るとなると、今の俺には確実にサイズが合っていないのだ。
「本当にどうすればいいんだ……」
本格的に悩み始めた俺だが、あることを思い出した。
「あ。そう言えば、あの家のクローゼットに、何着か服とか入ってたよな……？」
異世界のクローゼットの中には、あの時の俺には着ることができないサイズの服と下着が何着か入っていたのだ。
「取りあえず、それを着てみるか……」
現状他に当てがないので、俺はすぐに扉をくぐり、異世界の家の中に入ると、クローゼットを開けた。

するとやはり何着かの服と下着が置いてある。
見た目も白色のワイシャツと黒色のズボンで、シンプルだが地球でも見かけるタイプのモノだった。
「助かった……取りあえず、着れるよな？」
特に意味もないが、何となく鑑定してみる。
【ロイヤルシルクのシャツ】……ロイヤルシルクで作られたシャツ。非常に肌触りがよく、シルク製品の最高峰の気品を持つ。装着者の体型に合わせて自動で大きさを調整する。装着者の体温を常に適温に保つ。汚れない。自動修復機能が付与されている。契約者：天上優夜。
【ロイヤルシルクのズボン】……ロイヤルシルクで作られたズボン。非常に肌触りがよく、シルク製品の最高峰の気品を持つ。装着者の体型に合わせて自動で大きさを調整する。装着者の体温を常に適温に保つ。汚れない。自動修復機能が付与されている。契約者：天上優夜。
「ウソだろ」
何だよこのぶっ壊れ性能。服が持つ性能じゃねぇ。
しかも、最初にこれを見つけたときはまだ太ってたわけだけど、その状態で着ようと思

えば着れたのかよ。

さらに寒かろうが暑かろうが、これを着てればずっと快適な状態で過ごせるわけだろ？

本当に意味分からねぇ。

それに、とってつけたような汚れないっていう説明……これ、世の主婦が見たら大喜びな効果じゃないか？

あと、説明文を読んだからというわけじゃないが、確かにこの白いワイシャツと黒色のズボンは、妙な気品が漂ってる気がする。本当に気がするだけだが。俺に審美眼なんてものはない。

んなことより、服ですら契約者扱いされるってどうなのよ？　この世界ではこれが普通なの？　絶対違うよね？　そう信じてる。

服がこの性能なら、下着はどうだ？　と思い、下着にも鑑定をかけたが、下着はメチャクチャ着心地のいい下着というだけで、それ以外に特に効果みたいなものはなかった。

ただし、例に違わず契約者とやらになっていたがな。

ちなみに、下着は黒色の肌着に同じく黒色のボクサーパンツだ。

「本当に至れり尽くせりの対応だな……」

いや、賢者さんもこんな風に活用されてるとは思わないだろうけど、実際俺は非常に助

けられている。

他にも、クローゼットの中を探したら、靴と靴下も出てきた。

靴下は穿き心地がよく、蒸れないという効果と、契約者が俺ということ以外なかったが、黒地に金色のワンポイントが入った靴下は非常にカッコいい。

そして、靴の方はさらにぶっ飛んでいた。

【龍神の革靴】……龍種の頂点である、龍神の皮で作られた靴。地形による影響を無効化する。装着者はどれだけ歩いても走っても、疲れることも靴擦れすることもない。装着者のサイズに合わせて、大きさが変化する。汚れない。契約者：天上優夜。

とうとう神様が素材化された装備品が出てきた。

ナニコレ、本当にどうすればいいわけ？　当たり前のように契約者は俺だしさ。いや、ありがたいけど。

それでも手に余るよね？　普通の靴の領分を超えちゃってるよね？

だが、この靴も艶のある青みがかった黒色で、非常にカッコいいのだ。こんなの履きたくなるだろ。

まあ、実際足のサイズも変わっていたから、これを履くわけだけどな。

取りあえず、俺は服や靴などを手に入れ、これで外出する術を手に入れたのだった。

＊＊＊

「そう言えば、あの畑には何が育ててあるのかな？」
服を手に入れた俺は、一日経ったことでさらに好奇心を刺激され、再びこの家を調べてみようと思った。どうせ春休みの宿題も終えている。
さらに言えば、偶然によって俺が何年も働いてやっと手に入るようなお金も手に入れることができた。
せっかくこうして時間があるわけだし、何よりこの春休みが終わってしまったらまた忙しくなるだろう。
そう思った俺は、家の外に出て、畑を確認しに行った。
「おぉ、なんかよく分からない草と野菜？　が植えられてるな」
雑草と見間違えそうになる草と、トマトらしきものや大根らしきものがたくさん植えられている。
草の方は、綺麗に並んで生えているから、雑草じゃないと判断できた。
「ん？　あ、あれで水をやってたのか」
畑のすぐ近くに、銀色のジョウロが置いてある。

そのジョウロを持ってみると、中には水が入っていた。
「……もしかしてだけど、このジョウロもなんか特別なの？」
もしやと思い、一応鑑定してみると……。
【無限のジョウロ】……水が無限に湧き出すジョウロ。中の水は聖浄水と呼ばれるもので、どんな枯れた植物でも、この水をあげればすぐに元気になる。水は常に清潔に保たれているため、人も飲むことができ、飲めば全身の疲労を回復するだけでなく、魔力を増やすことができる。契約者：天上優夜。
「もう慣れてきた」
うん、分かってた。
そんなことだろうと思ってたさ。
もともとの家主である賢者さんは、俺の想像を遥かに超えるヤバい人って認識だからな。
そんな人が死んだってのも微妙な気分だが。
「んで？　この作物は？」
まず草に鑑定をかけてみる。
すると……。
【完治草】……食べれば四肢を欠損していようが、失明していようが、ありとあらゆる傷

や病気を治すことができる。また、魔力を回復させる働きもある。採取するとき、勝手に種を残すため、育てるのは非常に簡単。ただし、この草自体が伝説級に見つからない。

「やっぱり慣れなかったわ」

まさかここまでぶっ飛んだ効果だとは思わないだろ!?

これ、完全に医者泣かせな植物だよな。

取りあえず、育てるのが簡単ってことだけでも分かってよかったわ。

「じゃあ、他のは？」

どこか緊張しながら、植えてある作物全てに鑑定をかけてみた。

【超力トマト】……食べれば攻撃力が上昇するトマト。他にも体力・精力が増え、疲れにくい体になる。採取するとき、種を勝手に残すため、育てるのは非常に簡単。

【無敵かぼちゃ】……食べれば防御力が上昇するかぼちゃ。他にも精神を安定させる効果があり、精神攻撃や状態異常に強くなる。採取するとき、勝手に種を残すため、育てるのは非常に簡単。

【叡智の大根】……食べれば知力が上昇する大根。他にも並列思考や高速思考など、特殊な脳の使い方に対応できるようになる。採取するとき、勝手に種を残すため、育てるのは非常に簡単。

【神速ジャガイモ】……食べれば俊敏力が上昇するジャガイモ。他にも動体視力や反射神経などを強化する。採取するとき、勝手に種を残すため、育てるのは非常に簡単。

よし、言いたいことが山盛りだな。

まさかステータス上昇アイテムとはね！　賢者さんはどこを目指してたんだよ！

それに、例に違わず勝手に種を残すって意味が分からないよな！　そもそもジャガイモって種だっけ？　違うよな？

このファンタジー要素満載の野菜。いや、見た目は俺の知ってる野菜なんだけどさ。

「……まあ、食えるようだし、何よりステータスが上がるなら……食べようか」

そもそも、食えるのであれば、その分食費も浮くし、俺としてはありがたい。変な薬みたいな効果さえないならな。

「なんていうか……朝っぱらから疲れるなぁ」

まだ昼前だというのに、俺はすでに精神的に疲れていた。いや、仕方ないと思うんだけどね。

そんな風に思っていると、昨日ブラッディ・オーガと出会ったときの様な威圧感を感じた。

すぐにその方向に視線を向けると、そこには真っ黒なスライムらしき物体が。

「……何だアレ」

思わず鑑定をかけてみる。

すると、こう表示された。

【ヘルスライム】

レベル：200、魔力：5000、攻撃力：1000、防御力：5000、俊敏力：100、知力：100、運：100

「マジかよ……」

ブラッディ・オーガの次は、ヘルスライムですか……。

あの、どう考えてもこの森、初心者向きの場所じゃないよね？　いや、賢者さんがそんな場所にいたとは到底思えないけどさ。

ただ、魔力と防御力だけなら昨日出会ったブラッディ・オーガと変わらないはずなのに、俺は不思議と冷静だった。

確かに威圧感みたいなのは感じるのだが、昨日の様にすごく怖いとは思えなかったのだ。

いや、怖くないわけじゃなくて、腰が引けるほどの恐怖を感じていないのだ。

昨日より俺のレベルが上がったからとか、逆にこのヘルスライムがブラッディ・オーガよりレベルが低いからとか、そんな理由じゃない。

なんか、昨日とは精神構造が変わってしまったような、そんな感じなのだ。

……それを実感できるのも怖いことだが、まあ冷静な考えができるというのはありがたい。

そんな風に落ち着いてヘルスライムを観察していると、ブラッディ・オーガのように、この家の敷地の中に入ろうとすごい勢いで体当たりを繰り返していた。

「いや、本当にこの世界の生き物怖すぎるだろ……」

いくらなんでも容赦なさすぎじゃね？　人を見つけたら襲おうと全力で向かってくるんだぞ？

……そもそも地球が平和すぎるだけなんだろうか？

「まあいいや。あまり敷地から出たくはないけど、この家の周辺くらいは調べてみたいよな。そうなると、今の状況みたいに戦闘は避けられないのかなぁ……」

そう思いながら、俺は【アイテムボックス】から【絶槍】を取り出す。

「あれ？　普通に持てるぞ……」

何と、俺は【絶槍】を片手で持つことができたのだ。うん、これが普通なんだろうけど、



俺としてはすごいことだった。
まさか片手で槍を持てるとは思わなかった俺は、思わずその場で適当に槍を振り回してみる。
すると、多少槍に振り回されはするものの、何とか扱えるレベルになっていたのだ。
「おいおい、レベルアップの恩恵すごすぎるだろ。俺の筋トレは一体何だったんだ……」
これ、槍の使い方とか分からないから振り回されてるって感じだし、本で槍の使い方を調べてからその通りに使ってみたらどうなるかな？
簡単にはできないだろうけど、それでもこうして槍が使えるようになったわけだし、何より男としてそれは非常に惹かれるものがあるわけで……うん、少しずつでいいから強くなりたいしね。
「そのためにも、まずはアイツをどうにかしないとな」
俺は槍を握りなおすと、昨日はできなかった、投擲を行うことに。
なんか躊躇いのようなものが完全になくなっている俺は、大きく振りかぶり、片手で槍を投げ飛ばした。
「ウソだろ!?」
すると、槍は俺の予想以上のスピードで飛んでいく……どころか、気づいたらヘルスラ

イムの胴体に穴が開いていた。

俺の力は、俺が思ってる以上に強化されていたようで、まさか投げた本人の認識以上の速度で飛んでいくとは思わなかった。

呆然とする俺に、当たり前のように戻ってくる槍。

ヘルスライムは、少し体を震わせると、ブラッディ・オーガを倒したときの様に、光の粒子となって消滅していった。

そして、その場にはまたも同じようにいろいろなものが散乱していた。

「……回収しよう」

まだ現実味がなく、微妙な気持ちだったが、何が落ちているのかは気になったため、すぐに入り口まで向かった。

そして、辺りを警戒しながら落ちているモノを素早く回収し、鑑定する。

【ヘルスライムの核】……ヘルスライムの心臓部。膨大な魔力が込められており、様々な武具に加工して使える。

【ヘルスライムゼリー】……コーヒー味のゼリー。食べれば、魔力と防御力が増える。

【魔石：C】……ランクC。魔力を持つ魔物から入手できる特殊な鉱石。

「コーヒーゼリーかよ!?」

まさか、手に入ったものの中に、コーヒーゼリーに近いものがあるとは思わなかった。

それどころか、畑の作物と同じようにステータス上昇系だともな！

そしてまた、魔石も手に入った。……これ、またもや高値で換金されるのかな？

期待していないと言えばウソになる。俺の生活は厳しいから、お金が手に入るなら欲しいのだ。

ヘルスライムの核も、使い方が分からないので、できるなら換金したい。ヘルスライムゼリーは持って帰るけど。

落ちていた品々を鑑定していると、一つ鑑定し損ねていたことに気づく。

「あ、もう一つ落ちてた」

落ちてた物は、オシャレな三日月に黒色の宝石みたいなものが埋め込まれているシルバーネックレスだった。

「まさかのアクセサリー!?」

俺はゲームなど詳しくないため分からないが、こうしたアクセサリーなどが落ちるのは普通なのだろうか？　それとも、あのヘルスライムが着けてたのかな？　オシャレなスライムだ。

ってよく考えれば、ブラッディ・オーガも鎧とか落としたな……あの時は気が動転して

てそこまで考えが及ばなかったけど、素材だけじゃなくて装備品も手に入るのが普通なのだろう。

取りあえず、ヘルスライムから手に入れたことに変わりはないので、鑑定してみた。

【黒月の首飾り】……ヘルスライムから手に入る、レアドロップアイテム。装備者は夜間、様々なステータスが上昇する。また、太陽光を集め、それを魔力に変換し、装備者の魔力を常時回復させる。契約者：天上優夜。

まさかのレアドロップアイテムだった。

まあ、スライムがオシャレってのも意味が分からないしな。ちょっと残念だけど。

でも、効果は非常に良さそうだ。夜の間だけとはいえ、ステータスが上昇するらしいし、それ以外にも魔力を回復させてくれるのだ。魔力の使い方が分からないけどな。

せっかく手に入れた初のレアドロップアイテムなので、俺は装備してみることに。ネックレスなんて着けたことねぇや。

「似合ってるかねぇ？」

誰に聞いたわけでもないが、思わずそう口に出た。

以前の俺なら完全に似合ってなかっただろうが、今は痩せてるしちょっとは似合ってほしいよね。

そんな希望を抱いていると、メッセージが出現した。

『レベルが上がりました。スキル【気配察知】を習得しました』

「え」

いや、ちょっと待て。

あの激痛をもう一度味わわないといけないのか!?　確かにレベルは相手のほうが上だったし、レベルアップも理解できる。だが理解できても納得できるか！　嫌だぞ、俺！

取りあえず、一時的でも現実逃避をしたい俺は、スキルの確認をした。

【気配察知】……気配を察知することができる。

すごく簡単な説明だったが、つまり漫画とかの『そこにいるのは分かってるぞ！』的なことができるわけね。これは普通に嬉しいな。

さっきみたいに、アイテムを回収するときは敷地の外に出なきゃダメなわけで、その間の危険度を減らせる。

新たなスキルに満足したところで、とうとうステータスの確認に移った。

【天上優夜】

職業：なし、レベル：１５０、魔力：２０００、攻撃力：３５００、防御力：３５００、

俊敏力：3500、知力：2000、運：4500、BP：5000
スキル：《鑑定》《忍耐》《アイテムボックス》《言語理解》《真武術：1》《気配察知》
称号：《扉の主》《家の主》《異世界人》《初めて異世界を訪れた者》

結構上がってた。
てか、どれもキリよすぎじゃね？　こういうもんなの？　見やすいからいいけどさ。
「まあいいや。ＢＰを割り振ってしまおう」
ちょっと考えた後、俺はＢＰを割り振った。
その結果がこれだ。

【天上優夜】
職業：なし、レベル：150、魔力：2000、攻撃力：4500、防御力：4500、
俊敏力：4500、知力：2000、運：6500、BP：0
スキル：《鑑定》《忍耐》《アイテムボックス》《言語理解》《真武術：1》《気配察知》
称号：《扉の主》《家の主》《異世界人》《初めて異世界を訪れた者》

前とは違い、今回は魔力と知力にはＢＰを割り振らなかった。
その代わり、運に２０００ほど割り振ったのは、さっきのレアドロップアイテムがあったからだ。
完全な予想だが、この運というステータスが高ければ、さっきみたいに手に入りにくいだろうレアドロップアイテムがまた手に入るかもしれない。
それに、運がいいってだけでなんだか嬉しいしな。
朝っぱらからイベントの連続だったが、もう昼になったので、俺は一度家に戻るのだった。

続きは、12月20日発売のファンタジア文庫で！
©Miku, Rein Kuwashima 2018